平面構成・希望用途からみた座敷への住要求構造の分析

現代における住宅計画のための室要求構造の解明に関する研究 その1

A STUDY ON THE NEEDS FOR “ZASHIKI” FROM THE VIEW
OF THE PLAN TYPE AND FUNCTION

A research of relations between plan-types and function for contemporary house planning Part 1

切原 舞子*, 鈴木義弘**, 岡 俊江***

Maiko KIRIHARA, Yoshihiro SUZUKI and Toshie OKA

Based on the analysis of consistency between the plan of house planning one now lives in and the plan of house planning that is considered desirable by the dwellers, this paper intends to grasp how dwellers like to sit in “zashiki”. Results of analysis revealed dwellers yet seem to stick to keep “tokonoma”. As for the plan type of “zashiki”, there lies a noticeable dissociation (inconsistency) between dwelling plan and selection plan, vivid and increasing tendency in this respect is separation from living room as well as from “one room” to “two rooms”.

Keywords : zashiki, receiving guests, family living, house planning, detached house

座敷, 接客, 家族生活, 住宅計画, 独立住宅

1. はじめに

1.1 研究の背景と目的

本研究は、現代の独立住宅に対する室要求構造を明らかにすることを目的としており、接客空間^{注1)}と家族空間、および私的空間の相互関係性を捉え、住まい手の多様な要求に対応可能な住宅計画の知見を示すものである。本稿ではまず、座敷^{注2)}および和室の今日的存在意義と、住まい手の求める平面構成について考察する。

我が国の住宅の平面構成の変容は、「接客空間とだんらん空間の領域構成の変化」^{1) 注3)}と考えることができ、独立住宅における接客空間としては、座敷がこれに位置づけられてきたといえよう。伝統的に、座敷とこれに連続する次の間の「続き間座敷」は広く普及し、慶弔祭祀の多人数接客を考慮して配置され、日常的には主人の居室および寝室として、時には客の宿泊にも使われてきた。しかし戦後の食寝分離、就寝分離を重視した計画論において、座敷はその存在を無視され、戦後の公的供給の集合住宅の設計においては考慮されなかった。しかしながらその一方で、民間供給の独立住宅には厳然と継承されてきた。先行研究を示すと、1980年代に実施した調査(以下、[80'])^{注4)}では85.0%、2000年代の調査(以下、[00'])^{注5)}でも63.8%が座敷を設けている。ただし、その平面構成についてこの間の変容をみると、和室二室の「続き間座敷」は激減し、これに対

してリビングルーム^{注6)}と座敷が続き間のタイプが急伸しているのが現状である。また[80']では対象者の「住まい方」調査より、座敷を接客空間に位置づけることができたが^{注7)}、近年の研究では^{5)~7)}、来客の応対はリビングルームで行われる場合が多い。すなわち、現代においても座敷へのニーズが認められるが、その存在基盤は必ずしも接客機能にあるとはいえず、不明瞭である。

接客領域と家族のだんらん領域との関係性に着目した先駆的研究としては、まずは鈴木ら(1981年)⁴⁾による「デュアルリビング」の提案が特筆されるが、この他、江上(1989年)⁵⁾の研究や、近年では樋口(1994年)⁶⁾が、座敷とリビングルーム^{注8)}に対する住まい手の価値づけの違いが領域区分の違いをもたらすという仮説の実証を試みている。また笠嶋ら(1992年)⁷⁾は、来客の応対や宿泊位置を含む生活行為の分析から、ライフステージ別の要求とその変化についての考察を行っている。畳敷きという床面様式に対しては、扇田ら(1978年)⁸⁾が生産動向と現状と住まい手の要求の関係から今後の展望を述べ、近年のものとしては平井らの研究(2000年)⁹⁾が挙げられる。

これらの成果を念頭におきながら、本研究は独立住宅を対象にし、先行研究に引き続き、歴史的流れの中での発展段階として現代を位置づけ、平面構成と用途についての住まい手の希望も考慮して、座敷への住要求構造を捉えるものである。

* 大分大学大学院工学研究科 博士後期課程・工修

** 大分大学工学部福祉環境工学科
准教授・博士(人間環境学)

*** 九州女子大学家政学部人間生活学科 教授・工博

Graduate Student, Department of Eng., Graduate School of Eng., Oita Univ., M. Eng.
Assoc. Prof., Faculty of Eng., Oita Univ., Ph. D.

Prof., Faculty of Home Economics, Kyushu Women's Univ., Dr. Eng.

1.2 研究の方法

本研究では座敷について、平面構成と用途それぞれの現状と希望の整合性を捉え、この要因を両者の関係から考察する。分析にあたり、現状の住まいの平面構成を「居住プラン」、これに対し、住まい手が望ましいと選択したものを「選好プラン」と呼称する。本稿では、両者の整合性、すなわち一致しているのか、あるいは不一致の場合にはどのような乖離が生じているのかに着目しながら、その要因を、座敷への希望用途やライフステージ^{注9)}との関係から考察する。

なお、[00]研究において、床の間を持たない和室のみの住宅が約3割を占めていたため、これらの世帯も対象とし、「座敷あり」タイプと、床の間のない「和室のみ」タイプの比較考察もまじえ、これらを一括して呼称する場合には、座敷（和室）と表記する。

以上に基づき、本稿は下記で構成している。

- 1. 居住プランと選好プランの整合性の分析・・・・・・3章
- 2. 座敷（和室）への希望用途についての分析・・・・・・4章
- 3. 希望用途とプランタイプとの関係性についての分析・・・5章

1.3 居住プラン・選好プランの類型方法

独立住宅の類型化の参考となるものとしては、服部（1980年）¹⁰⁾、近年では森本（1993年）¹¹⁾の研究が挙げられる。本研究での平面構成の座敷（和室）の類型には、先行研究²⁾での「接客空間とだんらん空間が重合して平面構成が発展してきた」という考え方にに基づき、まずはリビングルームとの接続形式で2タイプ（「連続型」・「分離型」）に分ける。これに和室の数（「二室型」・「一室型」）、座敷（和室）へのアクセスの仕方、さらに床の間の有無を考慮して10タイプの類型で、分析を行う（図1）。なお本文では、「和室のみ」は添え字「和」を付加して、〈分Ⅱ和〉等と表記する。

表1 調査概要

アンケート調査の内容	
調査対象	1990年以降より分譲された全国9地域の戸建て住宅団地 北海道、仙台、千葉、茨木、愛知、富山、大阪、京都、広島、愛媛、高知、福岡、大分 2階建てのみ 総室数4室～6室、1階2～3室、2階2～3室の規模の住宅を想定
配布期間	2005年7月～8月 2006年8月～9月・2月～3月
配布数	8220件 収集サンプル数:703件(回収率:8.6%)
本研究有効サンプル数:369件

図1 座敷（和室）の平面構成

2. 調査概要

2.1 調査の方法

調査対象は、1990年以降に分譲された戸建て住宅団地とし、特定の地域には限定せず、地方区分（北海道、東北、関東、東海、北陸、近畿、中国、四国、九州）に従って、全9地域の各主要都市に所在する団地を選定した。戸別訪問によりアンケート調査票を配布し、郵送での回収を行った（表1）。有効サンプルは、和室をもたない事例を除いた369件である^{注10)}。

2.2 対象住宅・対象居住者概要

対象住宅は、延床面積82.5㎡～184.8㎡、平均133.3㎡^{注11)}、注文住宅64.5%、および建売住宅34.1%（不明5件）である。居室数^{注12)}は1階2室90.0%、2階3室69.1%が多く、1階に座敷（和室）1室とLDK、2階に3室を持つ「2-3」（235件）が約6割を占める（表2）。

床の間を備えた「座敷あり」は、全体では82.7%（305件）、地域別には6～9割と異なるが、本稿では全対象地域に共通する事象として指摘できる点についての分析考察を示す（図2）。

家族構成は、複合家族32件（8.7%）も含んでおり、世帯主年齢は25歳から77歳と幅広い。ライフステージ別では〈表3〉、子を持つ「分寝前」から「子世帯同居」では、より後者が高年齢層が多い。また、同居家族人数を捉えると、子が独立別居前である「分寝前」、「分寝以降」は、3、4、5人に三分される。

表2 室数構成

室数構成（1階室数－2階室数）									
2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	3-2	3-3	3-4	3-5	総計
4	51	235	41	1	5	20	11	1	369
1.1	13.8	63.7	11.1	0.3	1.4	5.4	3.0	0.3	
332					37				100.0

※斜体は全サンプル別構成比を示す

図2 床の間の有無と平均延床面積

表3 ライフステージの概要

ライフ ステージ [※]	世帯主年齢(歳)					同居家族人数(人)							同居末子年齢					総計	
	25	40	50	60	不 明	2	3	4	5	6	7	夫 婦	乳 幼	小 学	中 高	18 歳 以 上	不 明		
	5	5	5	5															
	39	49	59	77								み	児	生	校	生			
夫婦のみ	7	11	4	-	-	19	1	1	1	-	-	22	-	-	-	-	-	22	6.0
分寝前	66	58	2	-	-	-	34	56	29	4	3	-	75	42	2	3	4	126	34.1
分寝以降	21	68	55	20	1	-	55	81	26	3	-	-	9	41	60	53	2	165	44.7
独立別居	-	1	12	37	2	47	3	2	-	-	-	-	-	-	-	52	-	52	14.1
子世帯同居	-	-	3	1	-	-	-	1	2	1	-	-	-	-	-	4	-	4	1.1
総計	94	13876	58	3		66	93	14158	8	3	22	84	83	62	112	6		369	100.0

※斜体は全サンプル別構成比を示す

*夫婦のみ:子を持たない/分寝前:両親と同居就寝を行っている子がいる/分寝以降:子がみな別居/独立別居:子がみな独立別居中/子世帯同居:既婚子の家族と同居

3. 居住プランと選好プランの整合性の分析

3.1 和室および床の間の要否

分析対象は「和室あり」だが、選好プランでは「和室なし」がわずかながらある（6.5%）〈図3〉。「和室あり」選好93.5%の床の間の有無を考慮すると、「座敷あり」71.3%（263件）は居住プラン82.7%（305件）に比べて少なく、「和室のみ」22.2%（82件）が居住プラン17.3%（64件）に比べ増加している点が指摘できる。

選好プランを居住プラン別に捉えると、以下6類型となる。

居住プラン「座敷あり」の305件について

- i. 「ZZ」：（237件）「座敷あり」を選好した一致層
 - ii. 「ZW」：（51件）「和室のみ」を選好した不一致層
 - iii. 「Zn」：（17件）「和室なし」を選好した不一致層
- 居住プラン「和室のみ」の64件について
- iv. 「WZ」：（26件）「座敷あり」を選好した不一致層
 - v. 「WW」：（31件）「和室のみ」を選好した一致層
 - vi. 「Wn」：（7件）「和室なし」を選好した不一致層

「座敷あり」居住者のうち77.7%は「ZZ」で依然座敷を希望する
いわば床の間温存層であるが〈図4〉、16.7%（51件）は「ZW」の

図3 居住・選好プランの床の間の有無

図4 和室および床の間の要否

表4 居住プランと選好プラン

		選好プラン											総計	一致層	不一致層							
		「座敷あり」Z						「和室のみ」W							「座敷あり」Z			「和室のみ」W	「和室なし」n			
		分Ⅱ	分Ⅰ	連Ⅱ	連ⅠA	連ⅠB	計	分Ⅱ	分Ⅰ	連Ⅱ	連ⅠA	連ⅠB			計	「分離型」	「連続型」			計		
居住プラン	「座敷あり」Z	分Ⅱ	15	4	1	2	—	22	—	—	—	—	—	22	15	4	3	7	—	—		
			100.0											6.0%	68.2	18.2	13.6	31.8				
		分Ⅰ	16	39	—	8	1	64	2	12	—	2	—	16	3	39	16	9	25	16	3	
			77.1											19.3	3.6	22.5%	47.0	19.3	10.8	30.1	19.3	3.6
		連Ⅱ	5	1	3	4	—	13	—	—	—	—	—	—	3	3	6	4	10	—	—	
			100.0												13	23.1	46.2	30.8	76.9			
	「和室のみ」W	連ⅠA	17	18	9	57	4	105	4	10	—	14	2	30	11	57	35	13	48	30	11	
			71.9											20.5	7.5	39.6%	39.0	24.0	8.9	32.9	20.5	7.5
		連ⅠB	6	7	1	11	8	33	2	—	—	1	2	5	3	8	13	12	25	5	3	
			80.5											12.2	7.3	11.1%	19.5	31.7	29.3	61.0	12.2	7.3
	「和室のみ」W	計	59	69	14	82	13	237	8	22	—	17	4	51	17	305	122	74	41	115	51	17
			19.3	22.6	4.6	26.9	4.3	77.7	2.6	7.2	—	5.6	1.3	16.7	5.6	82.7%	40.0	24.3	13.4	37.7	16.7	5.6
		分Ⅱ和	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	1	—	—
			100.0													0.3%	—	100.0	—	100.0		
		分Ⅰ和	1	4	—	2	—	7	1	4	—	2	—	7	2	16	4	5	2	7	3	2
			43.8												43.8	12.5	4.3%	25.0	31.3	12.5	43.8	18.8
「和室のみ」W	連Ⅱ和	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	1	—	
		100.0													0.3%	—	—	—	—	100.0		
	連ⅠA和	3	2	1	7	—	13	2	4	—	14	—	20	2	35	14	5	8	13	6	2	
		37.1												57.1	5.7	9.5%	40.0	14.3	22.9	37.1	17.1	5.7
	連ⅠB和	—	1	1	3	—	5	—	1	—	1	1	3	3	11	1	1	4	5	2	3	
		45.5												27.3	27.3	3.0%	9.1	9.1	36.4	45.5	18.2	27.3
総計	計	5	7	2	12	—	26	4	9	—	17	1	31	7	64	19	12	14	26	12	7	
		7.8	10.9	3.1	18.8		40.6	6.3	14.1		26.6	1.6	48.4	10.9	17.3%	29.7	18.8	21.9	40.6	18.8	10.9	
		64	76	16	94	13	263	12	31	—	34	5	82	24	369	141	86	55	141	63	24	
		総計	17.3%	20.6%	4.3%	25.5%	3.5%	71.3%	3.3%	8.4%		9.2%	1.4%	22.2%	6.5%	100.0%	38.2%	23.3%	14.9%	38.2%	17.1%	6.5%

※太枠は居住・選好プランタイプ一致層を、斜体は居住プラン別の構成比、太字は全プラン別の構成比を示す

12件、〈連ⅠA〉居住者の〈連ⅠA和〉選好14件であり、床の間は不要とするものの、これを考慮しなければ、現状のプランタイプを支持している層も存在しているということがわかる。

3) 居住・選好プランタイプ不一致層の志向性

そこで以下では、居住・選好プランタイプの不一致層の志向性を捉え、その上で床の間の要否との関係性を捉えることとする。

プランタイプ不一致層の志向性は、次に示す、リビングルームとの接続形式、および和室数についての居住プランと選好プランの関係性の組み合わせで、整理することができる〈図5〉。

i. リビングルームとの接続形式について

「分離」志向：居住プラン「連続型」選好プラン「分離型」^{注13)}

「連続」志向：居住プラン「分離型」選好プラン「連続型」^{注13)}

ii. 和室数について

「拡大」志向：居住プラン「一室型」選好プラン「二室型」

「縮小」志向：居住プラン「二室型」選好プラン「一室型」

プランタイプ不一致層が188件みられ、一致層は「分離型」居住者20.3% (75件)、「連続型」居住者28.7% (106件)、計49.1% (181件)で半数に満たない〈図6〉。不一致層は、現状よりもリビングルームからの「分離」志向17.6%、和室数については「一室型」から「二室型」への「拡大」志向8.1%、その両方を志向する「分離・拡大」9.8%と、分離・拡大志向が計35.5%と顕著である。

床の間の要否を考慮すると、床の間温存層「ZZ」の不一致層(48.5%)が求めるのは、38.4%が座敷の分離・拡大志向であるが、さらにその志向性を強く示すのが、床の間の要否の面でも不一致層である「WZ」の「床の間必要層」であり、分離・拡大志向が46.2%と最も高く、居住・選好の食い違いが顕著に露呈した結果であると考えられる。一方「WW」はプランタイプ一致層が61.3%と高く、また「連続型」志向が半数に及ぶ点で傾向を異にするが、それでも不一致の場合には、分離・拡大を求めていることに変わりはない。

すなわち、全体の傾向としては、座敷(和室)とリビングルームとの連続性確保を求める層も認められるが、「連続型」から「分離型」への「分離」、さらには「一室型」から「二室型」への「拡大」志向が顕著であり、供給されているプランタイプの構成比とは相反する傾向を示す点が特筆できる。

3.3 ライフステージとの関係

まず、和室および床の間の要否について、「座敷あり」居住者は、いずれのライフステージでも「座敷あり」選好「ZZ」が7~8割と一定であり〈図7〉、「和室のみ」居住者については、サンプル数の少ない「夫婦のみ」で特異値を示す他に、差異はみられない〈図8〉。

選好プランで捉えると、「座敷あり」選好、すなわち「床の間必要層」263件について、ライフステージ別の顕著な違いをみせるのは、「座+洋続き間〈連ⅠA〉」と「座+和続き間座敷〈分Ⅱ〉」である〈図9〉。〈連ⅠA〉は「夫婦のみ」46.2%、「分寝前」47.6%では約半

図5 居住・選好プランの関係

図6 居住・選好プラン一致層と不一致層の志向性

図7 「座敷あり」居住者 和室および床の間の要否

図8 「和室のみ」居住者 和室および床の間の要否

図9 「座敷あり」選好層 選好プラン

図10 「和室のみ」選好層 選好プラン

数を占めるが、「分寝完了」28.7%、「独立別居」31.7%では1／3以下である。これに対して〈分Ⅱ〉は、「夫婦のみ」15.4%、「分寝前」16.7%に比べ、「分寝完了」27.9%、「独立別居」29.3%で高くなっており、〈連ⅠA〉とは反対の傾向を示す。一方、「一つ間座敷〈分Ⅰ〉」は2～3割と支持が一定している。「和室のみ」選好の「床の間不要層」82件でも、「分寝前」12.5%に比べ、「分寝以降」22.9%で〈分Ⅱ〉への希望が高いという同様の傾向が指摘できるが、〈連ⅠA〉への希望は約4割と一定であり、「床の間必要層」とは異なる（図10）。

つまり、夫婦のみや、子供が両親と同室就寝をしている期間、あるいは「和室のみ」を希望する場合には、「連続型」への要求が比較的高いといえるが、子が分離就寝を終えた後では、「分離型」、中でも「二室型」への支持が高いという特徴がみられる。

4. 座敷（和室）への希望用途についての分析

4.1 座敷（和室）への希望用途

座敷（和室）への希望用途は、〈図11〉に示す10項目について、それぞれ4段階評定尺度での回答を得た。以下の分析は、これを「希望あり」と「希望なし」の2段階評価に変換したデータを用いる。

1) 希望用途の傾向

座敷（和室）に求める用途（和室不要層を除く345件）を捉えると、『日常接客』が最も多く、「応対」71.0%、「宿泊」84.9%である（図11）。また、『行事・慣習』は「仏間」設置（69.6%）、「法事」利用（64.9%）がいずれも6割以上、家族の「祝い事」への利用も少ないながら22.3%みられる。『家族生活』としては、「就寝」30.1%、「趣味・仕事」24.3%、「子遊び」19.1%の主要用途以外にも、多岐に分かれ、用途を特定しない『予備室』希望も64.1%にのぼる。

2) 接客機能の内訳

『日常接客』・『行事・慣習』の接客機能は、『日常接客』では「応対+宿泊」が66.7%（230件）〈表5〉、『行事・慣習』では「仏間」

図11 座敷（和室）への希望用途

表5 座敷（和室）に求める接客機能の内訳

		『行事・慣習』							総計		
		『仏間』希望 あり				『仏間』希望 なし		希望 なし			
		仏	仏+法	仏+法+祝	祝	法	法+祝			祝	
『日常接客』	応対のみ	1	6	3	—	—	2	—	3	15	4.3
	応対+宿泊	i 18	106	48	6	14	3	6	ii 29	230	66.7
	宿泊のみ	8	27	4	—	2	—	2	18	61	17.7
	希望なし	iii 6	7	—	—	2	—	3	iv 12	30	8.7
	小計	33	146	55	6	18	5	11	62	336	97.4
		240 69.6				34 9.9			18.0		
無回答										9	2.6
総計										345	100.0

※ i：日常接客+行事慣習、ii：日常接客のみ、iii：行事・慣習のみ、iv：接客希望なし
仏：仏間、法：法事、祝：祝い事 斜体は「和室あり」選好層345件別の構成比を示す

希望69.6%（240件）、これに併せて「法事」を希望する場合58.3%（201件）であり、伝統的な用途を継承する志向が支配的である。

組み合わせで捉えなおすと、両方を希望する「日常接客+行事・慣習」が74.2%（256件）で最も多い〈表5〉。また「日常接客のみ」14.5%、「行事・慣習のみ」5.2%、の一方のみへの希望もみられ、依然9割以上が座敷（和室）に接客機能を求めている。

3) 『家族生活』・『予備室』機能と接客機能との重合性

『家族生活』希望184件のうち、「就寝」56.5%と「趣味・仕事」45.7%が多い〈表6〉。両者の有無で捉えようと、「就寝」のみ（51件）が多く、併せて「趣味・仕事」があるのは28件である。また「就寝」なしの80件の約2／3（56件）は、「趣味・仕事」への希望がある。

『予備室』希望との組み合わせでは、『家族生活』希望はなくとも『予備室』は希望する場合が27.5%（95件）みられる〈表7〉。

接客機能との重合性で捉えなおすと、次に整理できる〈表7〉。

- i. 「接客+家族重合」：173件（50.1%）—接客機能と併せて『家族生活』希望があり、「就寝」のある「接客+就寝」96件（27.8%）と、ない「接客+その他」77件（22.3%）に二分する。
- ii. 「接客+予備室」：92件（26.7%）—『家族生活』希望はなく、接客機能と併せて『予備室』への希望がある。
- iii. 「接客のみ」：59件（17.1%）—接客機能のみを希望する。
- iv. 接客機能希望なし：21件（6.1%）—「就寝」のみ8件、「その他」のみ3件、「予備室」のみ3件、無回答7件。

すなわち、座敷（和室）を必要とした場合であっても、接客専用希望するのは、そのうちの17.1%のみである。

表6 『家族生活』希望の内訳

		「就寝」												総計				
		「就寝」あり						「就寝」なし										
『家族生活』	「就寝」	45 (6)	12 (1)	5	4	6	6	2 (1)	16	-	-	-	-	-	96 (8)	55.5	104 56.5%	
	「趣味・仕事」	-	12 (1)	5	4	6	-	-	31 (1)	5 (1)	13 (1)	-	-	-	81 (3)	46.8	84 45.7%	
	「家事」	-	-	5	4	-	6	2	-	5 (1)	5	-	6	1	-	34 (1)	19.7	35 19.0%
	「子遊び」	-	-	-	4	6	-	2 (1)	16	-	5 (1)	13 (1)	-	1 (1)	16 (3)	63 (3)	36.4	66 35.9%
	総計	45 (6)	12 (1)	5	4	6	6	2 (1)	16 (1)	31 (1)	5 (1)	13 (1)	6	1 (1)	16 (1)	173	100.0	184
		96 55.5%						77 41.8%										
		104 56.5%						80 43.5%									100.0%	

※ ()内は『家族生活』のみを希望する11件の外数、斜体は「接客+家族重合」希望173件別
太字は『家族生活』希望のある全184件別の構成比を示す

表7 座敷（和室）に求める用途の重合性

			『家族生活』・『予備室』				総計	
			『家族生活』希望あり		『家族生活』希望なし			
			「就寝」あり	「就寝」なし	『予備室』あり	『予備室』なし		
接客機能	接客機能希望あり	『日常接客』のみ 『日常接客』＋『行事・慣習』 『行事・慣習』のみ	i. 「接客＋家族重合」	ii. 「接客＋予備室」	iii. 「接客のみ」			
			「接客＋就寝」	「接客＋その他」				
			12	17	12	9	50	
			77	57	77	45	256	
			7	3	3	5	18	
		小計		96	77	92	59	324
		27.8	22.3	26.7	17.1	93.9		
		iv. 接客機能希望なし	8	3	3	7	21	
			2.3	0.9	0.9	2.0	6.1	
	104		80	95	66	345		
総計		30.1	23.2	27.5	19.1	100.0		

※斜体は「和室あり」選好層345件別の構成比を示す

4.2 ライフステージとの関係

ライフステージ別で示唆的なのは、『家族生活』への希望であり、「分寝前」での「就寝」希望は43.1%（50件）で、その他のライフステージの約2倍である（図12）。「子遊び」も同様に、「分寝前」で35.3%（41件）と高く、一方「趣味・仕事」は、「分寝以降」で29.9%（47件）と最も高く希望されている。

希望用途の重合性で捉えると、「接客＋家族重合」は「分寝前」で62.9%と最も高く求められており、その後「分寝以降」46.5%、「独立別居」36.2%では低い。これに対応して、「接客＋予備室」は「分寝前」以外で高く、「接客のみ」は「独立別居」において要求が高まる（図13）。すなわち、座敷（和室）に対する家族生活への用途は、「分寝前」には、「就寝」を中心とした家族生活と接客との用途重合が強く求められているが、「独立別居」期になると、接客のみへの機能分化の要求も高まり、これが前章で指摘した、ライフステージ後期でのより高い「分離型」希望とも関わっていると考えられる。

5. 希望用途とプランタイプとの関係性についての分析

5.1 座敷（和室）に求める用途と選好プラン

1) 床の間の要否との関係

座敷（和室）への希望用途について、床の間の要否別の違いを捉える。『行事・慣習』希望で違いがみられ、「床の間必要層」の「ZZ」・「WZ」では「仏間」74.7%・80.8%、「法事」69.6%・65.4%に対し、「床の間不要層」の「ZW」・「WW」では「仏間」54.9%・45.2%、「法事」49.0%・54.8%であり、いずれも後者が2～3割低い（図14）。

仏間を設けることとそこで法事を行うことは、本来同一の営みで

あるから、一括して述べると、床の間の必要性は『行事・慣習』希望の有無に強く起因していることが指摘できる。とはいえ、実数は少なくとも「床の間不要層」の半数は、『行事・慣習』を希望し、また『日常接客』希望の有無では「床の間必要層」とは大きく違わない点からみれば（図14）、床の間の存在意義はさらに不明確化している側面もあることが指摘できる。

2) 選好プランとの関係

床の間の要否で座敷（和室）への希望用途が異なるが、以下では、床の間温存層の「ZZ」237件について、選好プラン別の分析を行う。

・和室数による違い

『日常接客』のうち「応対」が、「二室型」の「座＋和続き間座敷（分Ⅱ）」88.1%、「座＋和続き間座敷（連Ⅱ）」92.9%に対して、「一室型」の「一つ間座敷（分Ⅰ）」68.1%、「座＋洋続き間（連ⅠA）」72.0%で低い（図16）。同様に「祝い事」も、〈分Ⅱ〉35.6%、〈連Ⅱ〉50.0%に対し、〈分Ⅰ〉14.5%、〈連ⅠA〉19.5%では約半数、これほど顕著な差はないが、「就寝」も〈分Ⅱ〉35.6%、〈連Ⅱ〉35.7%に対し、〈分Ⅰ〉23.2%、〈連ⅠA〉29.3%と、「一室型」で希望度合いが低い。

・リビングルームとの接続形式による違い

「子遊び」は「分離型」の〈分Ⅱ〉16.9%、〈分Ⅰ〉11.6%に対し、〈連Ⅱ〉35.7%、〈連ⅠA〉20.7%と「連続型」で高い（図16）。

以上を踏まえて希望用途の重合性を捉えると（図17）、「接客＋家族重合」は、〈分Ⅱ〉、〈連Ⅱ〉、〈連ⅠA〉では半数を超えるが、その内訳は異なり、来客の「応対」や「祝い事」、また「就寝」希望は「二室型」でより高く、一方「分寝前」で顕著にみられた「子遊び」については、リビングルームとの続き間である〈連ⅠA〉でより高い

図12 ライフステージ別 希望用途の傾向

図14 床の間の要否別 希望用途の傾向

図16 選好プラン別 希望用途の傾向

図13 ライフステージ別 希望用途の重合性

図15 床の間の要否別 希望用途の重合性

図17 選好プラン別 希望用途の重合性

希望が認められる。これに対し、「一つ間」の〈分Ⅰ〉への「接客＋家族重合」希望は39.1%に留まり、「接客のみ」が27.5%と高い。

・「座＋洋続き間（リビングアクセス）〈連ⅠB〉」の特殊性

〈連ⅠB〉は13件と少数であるが、座敷へのアクセスがリビングルームからのみという他タイプとは異なる点、筆者らの予備的調査（2006年）¹²⁾においてみられた、顕著な増加傾向を考慮し、このタイプに言及を加える。

〈連ⅠB〉は、『行事・慣習』のうち「仏間」・「法事」は46.2%（6件）であり、他タイプが7割前後であるのに比べ低い。また「祝い事」（38.5% 5件）は「一室型」の他2タイプに比べ高い。また『予備室』希望が84.6%（10件）と高い等、廊下からも座敷へのアクセスが可能な〈連ⅠA〉とは異なる値を示す点が注目される（図16）。このことから、〈連ⅠB〉の座敷が、現状でも、より家族生活領域化していると判断できる。これを接客にも対応させるという重合性を評価する居住者には抵抗は薄いであろうが、これが〈連ⅠB〉の居住・選好の不一致層の多さに結びついている要因であると考えられる。

5.2 プランタイプの整合性と希望用途・ライフステージとの関係

さらに「ZZ」について、居住・選好プランの整合性と、座敷に求める用途、及びライフステージとの関係性について捉える。

・「座＋和続き間座敷〈分Ⅱ〉」居住者（22件）について

〈分Ⅱ〉居住者は、選好との一致層の比率が高く、68.2%（15件）である。「接客＋家族重合」の希望はこの一致層に集中し（図18）、「分寝以降」、「独立別居」、「子世帯同居」である（図19）。すなわち、座敷での家族生活（主に就寝や、趣味・仕事）への希望が〈分Ⅱ〉支持の一要因であり、接客中心への希望層は、〈分Ⅱ〉5件と、「一室型」〈分Ⅰ〉4件、〈連ⅠA〉2件の縮小志向に二分する。

・「一つ間座敷〈分Ⅰ〉」居住者（64件）について

〈分Ⅰ〉居住者の選好との一致層は、60.9%（39件）であり、不

図18 居住・選好プランの整合性と座敷への希望用途

一致層は〈分Ⅱ〉への選好が25.0%（16件）で拡大志向が指摘でき、〈連ⅠA〉への連続志向は12.5%（8件）のみである（図18）。

「接客＋家族重合」の希望は、一致層では33.3%（13件）であり（図18）、他プランが半数を超える点と大きく異なる。この13件中8件にみられる「就寝」希望のうち（図19）、6件が「分寝以降」、「独立別居」、「子世帯同居」であり、これが一致層の一要因である。

不一致層は主として〈分Ⅱ〉を選好しており、これは基本的には〈分Ⅱ〉一致層と同様の理由によるものといえる（図19）。これに対して〈連ⅠA〉選好、かつ「接客＋家族重合」希望が5件あり、うち4件が「分寝前」である点が特筆され（図19）、就寝をはじめ、リビングルームとの「連続型」に有用性を求める世帯である。

・「座＋洋続き間〈連ⅠA〉」居住者（105件）について

同一プラン〈連ⅠA〉選好は54.3%（57件）であり、不一致層は〈分Ⅰ〉17.1%（18件）の分離志向、〈分Ⅱ〉16.2%（17件）の分離・拡大志向と、「分離型」への支持が顕著である（図18）。一致・不一致の要因は、希望用途の重合性からは単純には読み取れない。いずれも9割以上が接客機能を希望しているが（図18）、『日常接客』希望の内訳から、「改まった客」のみへの「応対」希望が、〈分Ⅰ〉に9件（50.0%）にみられ、これが分離志向の要因として指摘できる。

さらにいずれも約半数みられる「接客＋家族重合」の内訳から、一致層〈連ⅠA〉選好は、前述の〈分Ⅰ〉居住者の連続志向と同様、「分寝前」が半数（34件中17件）を占め（図19）、「就寝」希望の全15件中9件がこれにあたり、分寝前での就寝利用の有用性を評価している世帯である。〈分Ⅱ〉選好でも同様に「就寝」希望が5件認められるが、「分寝前」（2件）の他、「分寝以降」（3件）でもみられ、またこの5件中3件は「趣味・仕事」も併せて希望している点が、分離・拡大志向の要因と言えよう。一方、〈分Ⅰ〉選好では「趣味・仕事」が6件、中でも「分寝以降」で4件と多い点が指摘できる。

図19 「接客＋家族重合」希望者のライフステージと用途の詳細

6. まとめ

- i. 座敷をもちながら床の間を不要とする例が認められるものの、温存志向は根強い。一方平面構成では、居住と選好の間に甚大な乖離、すなわち不一致層が存在しており、リビングルームからの分離、「一室型」から「二室型」への拡大志向が顕著である。
- ii. 座敷には依然、来客の応対や宿泊、仏間の設置や法事などの接客機能が求められているが、就寝・趣味・仕事・家事・子育ての機能も併せて求められており、先行研究[80]において、座敷を「実際に使うことがある部屋」と捉えた世帯が約1割であった^{注14)}のを考慮すると、座敷の家族領域化が著しく進行しているといえる。
- iii. ライフステージ別にみると、「夫婦のみ」や、幼い子と両親が同室就寝を行っている「分寝前」には、最も普及率の高い「座＋洋続き間〈連ⅠA〉」への高い支持が認められるが、「分寝以降」や、子が独立別居を果たし高年齢化した「独立別居後」では、「分離型」、中でも「座＋和続き間座敷〈分Ⅱ〉」への支持が高い。
- iv. この傾向は座敷に求める用途からもよみとれ、〈連ⅠA〉は子どもの遊びや、「分寝前」での就寝希望が高い。一方〈分Ⅱ〉は「分寝前」のみならず、その後のライフステージでも就寝希望がみられ、また趣味・仕事への希望も高く認められる。
- v. すなわち、リビングルームと連続している〈連ⅠA〉は、住宅取得時に多い子の幼い世帯や家族人数の少ない世帯の住要求に対しては、その有用性が評価されるが、その後のライフステージの移行に伴う住要求の変化には対応できず、これが普及度に対して低い評価、分離・拡大志向へとつながったと考えられる。

以上より、改めて現代の座敷の位置づけを考察すると、リビングルームとは別に二間続きの座敷を確保する間取りは、歴史的には接客本位性を意味するが、本稿で指摘した座敷の分離・拡大志向は、近年のリビングルームでの来客の応対の一般化を考慮すると、必ずしも接客空間の重視でなく、むしろ家族空間の拡大、あるいは家族空間であるLDKからの接客空間の隔離を意味するように思われる。

もう一方の傾向として、床の間を不要とする和室志向の増加やこれに顕著な連続志向、供給数の増加の傾向が認められる〈連ⅠB〉の家族生活空間への要求の高さを指摘した。少数ではあるが、〈連Ⅱ〉の存在も考慮すると、前述の分離志向とは形態は異なるものの、これも座敷の家族領域化進行の反映であると推察される。

しかしながら、依然純粋な接客空間として座敷を求める層もあり、この場合の居住・選好プランの整合性との関係については、住まい手らの実際の接客行為や、その空間との関係性を探る必要がある。また、床の間の要否については、接客利用と家族生活利用とで明確な相関はみられず、現代における床の間の存在意義は単純なものではなく、今後住まい方調査などを通じて解明すべき重要な課題である。鈴木（1984年）¹³⁾の指摘する、住宅の対社会性の重要性、閉鎖化進行への危惧を念頭に、引き続き座敷の存亡を探る必要がある。

謝辞

本研究の調査にあたりご協力いただいた居住者の皆様をはじめ、アンケート配布に協力してくださった各大学の先生および学生の方々、大分大学鈴木研究室卒業生諸氏に心からお礼を申し上げます。

注

- 注1) 来客の応対・宿泊、および慶弔祭祀が行われる空間を接客空間、食事やだんらん行為が行われる空間を家族空間、さらに就寝や個人の趣味・娯楽に利用される空間を、私的空間と定義する。
- 注2) 床の間を備えた和室を、座敷と定義する。
- 注3) 文献2) 参照。なお、ここでのだんらん空間とは、家族の食事やだんらんの場である茶の間を核とする空間を指しており、[80']において住宅の平面を類型する際には、だんらん室として、DK(台所と食事室)またはK(台所)に接続(半間以上の開口で隣接)している部屋(和室も洋室も含む)をこれに定義している。
- 注4) 1982年、1983年に、秋田県を除く46都道府県から新築独立住宅の新開折込み広告を収集し、10532件をサンプルとして接客空間確保の状況を全国規模で把握しようとしたものである。文献1)の(2)現代研究編、および文献2)参照。
- 注5) 注4)と同様の調査を1998年～2001年に実施。全国47都道府県か5602件のサンプルを収集し、住宅の平面構成の実態の解明を試みた。文献3)参照。
- 注6) DKまたはKに半間以上の開口で隣接する洋室を指す。
- 注7) 文献1)の(3)現代研究編参照
- 注8) 樋口は座敷を床の間付き和室、リビングルームを椅子式居間と呼称している。
- 注9) 世帯主夫婦とその子どもの就寝形態による類型をライフステージと定義する。
- 注10) 平面構成(平家,3階建て,二世帯住宅)、世帯構成(独居,一人親世帯)、居住期間(1990年以前入居,1年未満)等、比較考察する上で妥当性を欠くサンプルの他、現在居住する住宅平面と選好する住宅平面の食い違いを明確にするため、〈図1〉に示す他、1階に洋室や和室を持つプランは有効サンプルから除いた。
- 注11) 延床面積の有効回答237件(64.2%)による値である。
- 注12) 居室とは、DK以外の室で4.5畳以下の室を除く室とする。
- 注13) 〈連ⅠB〉および〈連ⅠB和〉居住者の、〈連ⅠA〉および〈連ⅠA和〉への選好は、リビングルームのみでなく廊下からの座敷(和室)へのアクセスも可能にするという意味で、「分離」志向、その反対を「連続」志向と定義する。
- 注14) 1984年、全国47都道府県を対象に実施された、必要とする接客室の形態と座敷へのイメージについてのとしたアンケート調査。有効サンプル3026件のうち、座敷を「格式・伝統的な部屋」と考えている例80.6%、「実際に使うことがある部屋」と実用的に捉えている例は13.2%であった。文献1)の(3)現代研究編参照。

参考文献

- 1) 九州大学青木研究室:中流住宅の平面構成に関する研究(1)～(3)、住宅建築研究所報、第10号～第12号、1983～1985
- 2) 岡俊江、竹下輝和、青木正夫:接客空間とだんらん空間を指標とする類型化と平面構成の考察～現代の中流住宅の平面構成に関する研究 第1報～、日本建築学会計画系論文報告集、第383号、pp.64～73、1988
- 3) 岡俊江、鈴木義弘他:「座敷とだんらん空間からみた新築分譲住宅の平面構成の変容過程に関する研究 第1報～第3報、第6報、第8報」日本建築学会大会学術講演梗概集、2001～2005
- 4) 鈴木成文、初見学:住居における公室の計画に関する研究、住宅建築研究所報、No.8、pp.119～132、1981
- 5) 江上徹:多目的空間としての居間の計画に関する研究、住宅総合研究財団研究年報、No.16、pp.105～120、1989
- 6) 樋口栄作:4つの価値次元からみた接客性空間の価値づけ構造分析、日本建築学会計画系論文報告集、第456号、pp.85～92、1994
- 7) 笠嶋泰、今井正次、松本壮一郎:重合住宅の住戸平面と接客・宿泊位置～ライフステージによる住み方変化の研究 4～、日本建築学会計画系論文報告集、第442号、pp.47～55、1992
- 8) 扇田信、西村一郎、今井範子:住様式に関する研究―床面様式と起居様式―、住宅建築研究所報、No.5、pp.47～70、1978
- 9) 平井ゆか、内田祥哉:畳と畳を支えるシステム開発と普及についての文献に関する研究、住宅総合研究財団研究年報、No.27、pp.263～274、2000
- 10) 服部岑生:平面類型から見た住様式の動向に関する研究(1)、住宅建築研究所報、No.7、pp.87～116、1980
- 11) 森本信明:住宅金融公庫融資(個人)を受けた戸建て住宅平面の研究 (その1) (その2)、日本建築学会計画系論文報告集、第444号・第451号、pp.11～20・105～113、1993
- 12) 山口暁、鈴木義弘、切原舞子:居間中心型住宅の急増の実証とその動向に関する研究―大分市P団地における平面構成の経年変化をケースとして―、日本建築学会九州支部研究報告、計画系 第46号、pp.41～44、2007.3
- 13) 鈴木成文:住居における対社会性の変遷と構造、住宅建築研究所報、No.11、pp.145～157、1984

(2008年2月10日原稿受理、2008年7月28日採用決定)